

事例 2

1 研究テーマ

「自ら学ぶ力の育成～自己の学習を管理・認識することによって学習時間を増やす～」

2 テーマ設定の意図

本校は伝統ある、いわゆる進学校に位置付けられているが、近年学力低下が問題となってきた。一口に学力低下といってもその原因は多岐にわたる。入学者の学力が低下しているのか、もしそうであるならばなぜ入学者の学力が下がってきているのか、授業の質が低下してきているのか、生徒の学習意欲が何らかの原因で維持できないのか、さまざまな要因が複雑に絡まっているのかなど、その特定は非常に困難である。

授業を行っていて感じることに、生徒の受動的な授業態度があげられる。社会の変化と共に、生徒たちは与えられることに慣れ親しんでしまい、自主的に課題を見つけ解決するといった能動的な学習態度が身に付いていないように感じられる。

1学期の中間考査、期末考査後に、担任するクラスで行ったアンケートでは、家庭学習の必要性を認めながらも実施できていない現実が浮き彫りとなった。

3 調査研究の内容

(1) 対象科目

英語 (1年生必修科目、3単位)

(2) 対象クラス

担当する3クラスを対象とした。3クラスとも元気がよく、指示には素直に従う。

1学期定期考査のクラス平均は、学年9クラス中それぞれ上位、中位、下位に属する。

(3) 調査方法及び実施手順

まず実態把握のためのアンケートを実施、それに基づいて授業方針を決定し、生徒に説明をする。授業を行った後、再度アンケートを行う。

今年度、1学期の中間考査、期末考査後に担任するクラスに対して普段の学習に関する調査を行い、また、校内で生徒の家庭学習習慣について把握するための実態調査を行ったのでそれらのデータも参考として用いることにした。

6月上旬 中間考査を振り返って(担任クラスのみ、生徒・保護者記入)

7月下旬 期末考査を振り返って(担任クラスのみ、生徒・保護者記入)

7月下旬 英語の授業、英語学習に関するアンケート実施

夏季休業中 アンケートの結果分析と新授業方針の決定

9月下旬 新方針に基づく授業実践

11月下旬 1、2年生を対象とした生徒実態調査(1、2学年全クラス)

12月下旬 英語授業に関するアンケート実施

新方針に基づく授業は、文化祭、校内英語暗唱コンテストのクラス代表を決める活動などの関係で、9月下旬からのスタートとなった。

4 実践事例

(1) 生徒の実態 (資料1)

本校には7年勤務しているが、1年生の授業を持つのは実質的に初めてである。以前少人数(20人)のクラスを1クラス、週1時間だけ担当したことがあるだけである。そこで、生徒の実態を知ることと、家庭との連絡を密にする目的で、担任するクラスの生徒に、定期テスト後にアンケートを行った。それによると、家庭での学習時間が適正だと感じている生徒は38人中7人、18パーセントにとどまり、普段の学習時間は全科目合わせて平均42分である。試験前では平均3時間にのぼるが、普段必要と考えている学習時間は平均126.5分である。

勉強に力を入れている科目は

数学
化学
英語
国語
理科総合B

の順である。

家庭で勉強をする理由は、

前回のテストの点が悪かったから
苦手だから
好きだから

となっている。

反対に、力を入れない科目は

保健
家庭科
古典
理科総合B

となっていて、英語、数学、国語、理科、社会の教科はほとんどの生徒が力を入れていた。

力を入れないことの理由は

- ・ 5教科に力を入れた
- ・ 得意科目だから
- ・ 実技科目だから

などがあげられたが、少数ではあるが、

- ・ やってもわからない
- ・ どうすればよいかわからない

というものもあり、高校入学後に学習につまずいてしまった生徒が数名いることがうかがえる。

保護者の感想の中で最も多かったのは、「高校入学以来全く勉強をしなくなってしまった。」というものである。高校入学以来勉強しなくなってしまったことの原因は定かではないが、生徒を観察していると、5月に行われた遠足や、6月の体育祭の応援合戦の練習など年々過熱する行事の準備等に熱中し、それらに高校生活の楽しみを見つけたからではないかと推測できる。

(2) 英語の授業、英語学習に関するアンケート (7 月実施) (資料 2) (資料 3)

クラスの生徒の実態を把握した後、期末考査後に担当する 3 クラスの生徒を対象に、英語学習に関するアンケートを実施した。119 名が回答。

英語学習の開始時期は小学校高学年が最も多く、次に中学に入ってからが続く。英語は「どちらかと言うと好き」が最も多く、次いで「好き」と「あまり好きではない」が同数で並んでいる。

英語の授業に関しては、どちらかと言うと好きが最も多いが、次にあまり好きではないが続く、好きは 3 番目になる。英語は好きだが、授業はあまり好きではないということが伺える。授業の理解度も同様の結果で、51～75% 理解できていると思っている生徒が最も多いが、26～50% しか理解できていないと認識している生徒がそれに続いている。授業への集中に関しては、51～75% が最も多く、次いで 76～100% となっており、授業には集中しているものの、授業内容の理解度にはやや否定的であるという結果となった。授業の構成を考える上で重要なポイントであると考えられる。

英語の家庭学習に関する項目では、全くしていない～30 分以内が 81.4% にものぼることが分かった。これは家庭での 1 日の総学習時間が 42 分という担任クラスでの結果と符合する。予習、復習に関してもほとんどの生徒が行っていないことがわかった。

この時は英語学習に関する意識調査も行った。それによると、3 クラスとも、生徒は「外国語を学ぶのは、大人よりも子供のほうが簡単である。」「英語を正しい発音で話すことは大切だ。」「何度も繰り返し練習するのは大切である。」「カセットテープや CD を使って練習するのは大切である。」「英語が出来れば大学受験に役立つ。」「英語が出来ればよい仕事につくチャンスがある。」に高い値を出している。また、2 クラスでは「英語の勉強はアメリカやイギリスなどで勉強するのがよい。」「私は外国人と友達になりたい。」と考えている生徒が多くいることがわかった。生徒は英語学習に何らかの興味、必要性を感じながらも、学習していないことがわかる。

「どのような英語の授業を望んでいますか?」「授業に対する要望がありますか?」という問いには、

- ・今までのとおりでよい。
- ・楽しくてわかりやすい授業。
- ・大学受験用の英語ではなく、その先も有効活用できる英会話など学びたい。
- ・やる気が出るような授業。
- ・もう少しゆっくり進めて欲しい。
- ・英語だけで授業をされるとついていけない。
- ・プリントを活用した授業。

などの意見が寄せられた。

(3) 新授業方針の決定

担任クラスや授業に出ているクラスのアンケートから見てきたものは、生徒た

ちは勉強の必要性は感じているものの実際に行動に移してはないということである。しかし、担任クラスのアンケートでは、試験前には1日3時間程度の勉強をしており、また普段でも全科目あわせて2時間程度の勉強が必要であると感じていることがわかった。また、英語授業に関するアンケートでは、授業で配布している補助プリントを使った授業がおおむね好評である事もわかった。

*水島(2003)は大学生に月間の英語学習時間を記録させ、TOEICの成績の変化を調査したところ、全国平均レベルの英語能力を持つ学生は月平均40時間の英語学習を行っていることがわかった。この時間の勉強によってどの程度TOEICの成績がアップしたかは不明であるが、自分で自己学習時間を設定させ、それを記録していくことによって自己学習の動機付けにつながると水島は結論付けている。水島によると、自己学習の記録を付けると、

毎日英語に触れる習慣が付く。

講座終了後の自己学習につながる。

短期の目標設定が出来る。

英語が楽しくなる。

という感想があげられたそうである。

上記の事柄を考慮して、2学期以降の授業の方針を次の3点にまとめ、提示した。

自己学習の記録を付けさせる。

具体的には、授業以外での英語の勉強時間を記録させる。

学習の手助けとなるようなプリントの作成を心がける。

本校の生徒にはやや易しすぎるという感もあるが、普段予習をしていない生徒が多く、また、予習の仕方が分からない・身に付いていない生徒も多くいることから、予習を促進するようなプリントを作成する。

毎時間何らかの小テストを実施することによって生徒に勉強する・しなくてはならないという環境を作る。

予習と同様復習もほとんどの生徒が行っていないため、授業で扱った語句・文法事項などの小テストを行う。

(4) 授業の実践例

2学期の授業は文化祭や夏休みの課題の詩の暗唱(10月に行われる校内英語暗唱・弁論大会のクラス代表を選ぶもの)などで授業が変則的となり、落ち着いた授業は9月下旬からとなった。1学期同様毎時間プリントを作成し、予習、復習を指示した。成績のよい生徒にとっては当たり前の内容であり、逆にやる気を阻害してしまう可能性もあるが、全員に家庭学習の定着とその記録を意識させるためあえて作成した(資料4-1)。

これまで授業ではオーラル・イントロダクション、英問英答などを行い、英語の使用量を多くすることに努めてきたが、アンケートに詳しい説明が欲しいという意見が多く寄せられたことから、必要に応じて日本語による説明も増やした。また、本校の生徒は素直で、どちらかというと子どもっぽいところがあり、音読などはのせると大きな声で行うので音読の指導を1学期以上に行うことにした。音読の重要

性は以前から指摘されており、

音声に慣れさせること

既習事項を内在化させること

アウトプットへの橋渡しとすること

などを目的に毎時間行っていた。しかし、予習、復習ができていない生徒を観察したところ、英語の音声が生徒についておらず、新出語句のみならず、教科書本文中の既出語句の中にも正確に発音できないものがあり、そのことが学習の妨げになっていると考えられたため、内容理解が終わった後、教師、CDの後について音読するだけでなく、ペアでお互いに読み聞かせ、感想を言わせる、シャドーイング、(資料4-2)にあるような語句を一部抜き出したプリントを見ながら、などの様々な音読活動を行い、知らず知らずのうちに英語を内在化させるようにした。時には音読に10分以上かけることもあったが、生徒の反応は予想以上によかった。特にペアで読み聞かせるときは、コーラスで読むときに適当に読んでいた生徒も相手の方を見ながら伝えるように意識していた。また、語句を抜き出したプリントを使うときには生徒の学習段階に応じて教科書を見てもよいなどの変化をもたせたところ、より真剣に取り組むようになった。

予習・復習がプリントだけになってしまうと自らの学習スタイルの確立を阻害してしまうため、授業では、語句推測させたりすることはもちろん、英語で定義させたり、教科書で取り上げられている内容と同じものを別の英文で読ませたりするなど、様々な活動を行うよう工夫した。

(5) 生徒実態調査 (資料5)

生徒の学習時間については、本調査研究だけでなく、全校的な問題としても取り上げることとなり、1、2学年の生徒全員を対象に家庭での学習時間やアルバイトの実態等について調査を行った。これは毎日の家庭での学習について科目と時間を詳しく報告させるものである。調査は11月に行われた。詳しい結果は割愛するが、勤労感謝の日を含む3連休があったにもかかわらず生徒の学習時間は伸びておらず、逆にアルバイト等に時間を使った生徒が多くいることがわかった。1日の英語の平均学習時間は、教えている3クラスでは一番多いクラスで33.2分、少ないクラスで21.1分、全体では27.2分であった。この結果は1学期に行ったアンケートの結果とほぼ同じである。生徒の記録ではもう少し勉強をしているということであったのでこの結果には驚いた。生徒は授業に合わせて予習・復習を行ってはいるが、自主的に勉強するということまでには至っていないようである。しかし、中には1日3時間以上も英語の学習に励んでいる生徒もあり、上位層と下位層の差が広がってきていることが伺える。

(6) 英語の学習に関するアンケート (資料6) (資料7)

2学期の期末考査後に再度アンケートを実施した。アンケート項目が減っていたり内容が1学期終了時と異なっていたりするのは、同じ時期に生徒による授業評価が行われ、同じような内容が聞かれているからである。授業評価は1学期末、2学

期末に全校生徒を対象に行われている。

アンケート結果を見ると、残念ながら学習時間が大幅にのびるということとはなかった。各クラスとも普段の英語の学習時間については、1日につき30分までの生徒が7月の81.4%から12月は78.2%へと微減。31分～60分の生徒は7月の16.9%から12月の21.0%へと微増し、わずかながら増加傾向が見られた。2学期英語の勉強時間が増えたと答えた生徒は44.5%、変わらないと答えた生徒は39.5%であった。逆に減ったと答えた生徒が16.0%いることも分かった。

予習・復習への取り組み方であるが、44.5%の生徒が復習に力を入れ、予習に力を入れている生徒は33.6%であった。予習・復習両方に力を入れている生徒は9.2%しかいなかった。

英語の授業の理解度は41%～60%と答えた生徒が38.1%おり、21%～40%、61%～80%と答えた生徒がそれぞれ約25%であった。英語が好きな生徒は52.9%、普通が29.4%であった。英語の授業が好きであるかという問いに対しては、7月のアンケートでは否定的な回答が34.8%だったものが、12月には8.4%に減少した。

(7) 生徒による授業評価 (資料8)

本校では生徒による授業評価を年2回行っている。本調査研究とは別の枠組みのものであるが、意図することや質問事項には重なるところも多い。詳しい結果は割愛するが、この評価ではマークシートによる回答のほか、記述式による授業に関する感想が寄せられる。感想では授業について肯定的な意見が多かった。

5 成果と課題

(1) 授業方針について

プリントを使用した授業は非常に好評である。多くあげられた感想は、

- ・授業のポイントがつかみやすい。
- ・最低限やらなければならないことがはっきりしている。
- ・プリントに沿って授業が進むので授業についていきやすい。

などである。しかしこのことは自主的に学習方法を見つけ出そうという意欲を育てることにつながらないという面もあわせもつ。

(2) 学習時間の記録について

生徒たちは自分の生活を振り返ることができ、それなりに効果があったようである。しかし、中には形式的に記録をするだけで学習態度の変化につながらない生徒も見られた。記録を付けることの意義を浸透させる工夫が必要であると感じた。

(3) 小テストについて

小テストの勉強はよくやってきている。しかしこれもマンネリ化してきてしまっているところがあり、常に高得点を取る生徒と、時々高得点を取る生徒、毎回勉強をしてこないで成績の悪い生徒と階層化してきている。*羽鳥(1977)では「あまりにも頻繁に行われるテストでは、刺激という効果がうすれるということ、非常に悪い成績しか取れない生徒には、自分は一定の点しかとれないという要求水準の低下を起し、ひいては劣等感にも通じることがあるので用心すべきであろう」とあ

る。*大久保（2003）の調査でも同様の結果が出ている。しかし、反対に、定期考査等ではいつも悪い成績しか取れない生徒が、小テストで満点を取り自信をつけたこともある。動機付けにつながる小テストと、その動機を維持させる活動についても考えていく必要がある。

（４）その他

音読や、英語での英問英答、レベル分けした課題などは非常に評判がよい。高校１年生ということもあるが、実技科目としての側面を意識して、やや子どもっぽいと思われるような活動であっても必要に応じて動機付けの方法として取り入れることも必要である。

今回の調査研究では、劇的な変化を引き起こすことはできなかったものの、一応の手ごたえを得ることはできた。生徒との人間関係の変化による部分もあるだろうが、授業方針を変え、生徒にそのことを丁寧に説明し、また、毎時間授業の初めにその日のポイントを示し、さまざまな活動を取り入れることによって生徒の授業の反応が変わってきたことは確かである。学年９クラス中、上位、中位、下位にあった３クラスであるが、２学期定期考査ではクラス間の比較において３クラスとも向上が見られた。うち１クラスは学年トップに上昇した。授業以外の英語の学習時間を増加させるという目標を達成するためには、さらに別の角度から工夫を凝らす必要がある。

また、量的な改善の次の段階として質的な改善も考えていく必要がある。高等学校の課程修了後も自立した学習者として、自ら学び続けるのに必要な力を育てるには、生徒の学びの質の変容を促すことが必要である。学ぶ動機をいかに内在化させるかが今後の大きな課題である。

生徒に自己の学習を管理するよう働きかけることは、教員自身が自己の取組をつぶさに振り返ることにもつながる。教師が自らを再点検しつつ、生徒とコミュニケーションをとり、方策を探っていくことが、真に主体的に自ら学ぶ力をはぐくむことに通じるのだと考える。

参考文献

- 水島孝司． 2003 「自己学習を支援する大学英語授業」『文教大学文学部共同研究費による英語学習の動機づけに関する研究』第２次報告書
- 羽鳥博愛． 1977 「英語教育の心理学」大修館書店
- 大久保直美．2003 「小テストと動機づけ」『文教大学文学部共同研究費による英語学習の動機づけに関する研究』第２次報告書